

## 入門教育と「出門」

県中教研会長 白石 豊

拙いことしかできないうちに、教員生活も残りわずかとなっている。そんな日々の中で、教育の行き着く先ということを考えることがある。

これまで教室で出会った少なくない生徒たちと、その後いろいろな場面で出会うことがある。そんな折、職業上、社会生活上、あるいは家庭生活上の人間的成長というか成熟というか、そんなことの一助となるきっかけを学校時代に得たと話してくれる者がぽつぽつといる。有り難く、また嬉しいことである。そんなことから考えるのが「入門教育としての教育」ということである。

共同体を作って生きる人間が高度に築いてきた現代文明の中で、私たちは暮らしている。自然科学や社会科学、また産業や文化の諸成果を享受している。それぞれの分野では、ある種の作法を満たして営為が続けられ、精緻なものを作り出している。近代以降の市民はこれに「契約」し、基本的には信頼し、時には疑いや批判の目を向けつつ暮らしている。

ある学問や文化、産業や技能の分野に関心を持って信頼し「契約」を結ぶこと、これを「入門」と言っているのである。そして義務教育の範疇では、上手な入門をさせてやれたなら、その生徒は同時に「出門」しているとも言えるのではないか。「出門」なる言葉があるのかどうか、知らない。一応一人前になって、後は自分でやっていくというような意味が「出門」である。

ちなみに入門した後の教育については学者なり専門家なりが考えているだろう。また、「出門」したとしても、その道で卒業したわけではなくて、常に新しい勉強をしていかなければならないはずだ。

教科の神髄や教師が大切にしていることに、生徒が興味や学びを覚醒する一瞬ということがありはしないか。これは時として学級全体で起こったり、一人一人の生徒に個別に起こったりもすると思う。これを古い俚諺で例えるなら「啐啄同時」と言うのではないか。またラカンの有名な一節「教師は生徒が答えを見出す、正にその時に答えを与える」も同じことを言っているのではないか。

この一瞬が入門の大きな要素となると思う。またその一瞬を経て、生徒の人間的な成長は次の段階に入るのではないか。

私自身は自己の拙さを自覚しつつ、何とか生徒を上手に入門させてはやれないものか、いや門を見上げる一瞬でも作れないかと精進をしてきたつもりである。そしてベテランと言われる年齢になってようやく、そんな一瞬を根気よく待つことも少しはできるようになってきたと思っている。